

タイトル	世界史的諸個人の陶冶の世紀
著者	神山, 義治; KAMIYAMA, Yoshiharu
引用	北海学園大学学園論集(163): (1)-(15)
発行日	2015-03-25

世界史的諸個人の陶冶の世紀

神山義治

1 資本主義に疎外された人間存在——資本の人類史

資本主義はどのような理由によって発生し、そしてそれはどのような最終地点に帰着するのであろうか。この問は、地球規模での問題群が私たちに提起している問であり、資本主義みずからがその解決を資本主義に生きる諸個人に迫っている問である。資本主義が私たち自身の産物であり、高次の自己の姿であり、必然的に再生産されているものであるかぎり、私たちは資本主義自身から新たな道を聞き出すことができるはずである。マルクスが資本主義を必然的な理由をもって生まれ、やがてその理由を解消して衰滅する「通過点」とよぶとき、それは対象把握に疎遠な価値観や、対象の外部の理念や、由来のみえないイデオロギーとしてではなく、私たち自身の疎外された自己の運動に内在する把握として語っている¹⁾。

彼は、労働による社会形成において資本主義が必然的な役割を遂行し、この遂行において自己を世界史の特殊な通過点として絶えず否定しつつ実現していることを資本主義の現在の運動自身からつか

みとり、諸個人を担い手とする資本主義自身の生きた総体としての自覚化のモメントとして理論的に開陳している。

資本は、それ自体はその本性からして局限されたものではあるが、生産諸力の普遍的な発展につとめるのであり、こうして新生産様式の前提となる。……この傾向は——同時に、一つの局限された生産形態としての資本自身に矛盾し、だからまたみずからの解体へと資本を駆り立てていく傾向なのであつて——、資本をそれに先行する一切の生産様式から区別すると同時に、資本は単なる通過点として措定されているのだ、ということをうちに含んでいるのである。（『経済学批判要綱』²⁾）

労働の社会的生産力の解放された、自己目的化した発展こそが資本の諸世紀を特徴づける。生産力の「普遍的な発展」に自己を駆り立てる資本の「傾向」は、自己自身の局限性と矛盾し、資本の発展は不断に自己解体的である。資本の絶えざる蓄積の永久性は仮象で

世界史的諸個人の陶冶の世紀

神山義治

1 資本主義に疎外された人間存在——資本の人類史

資本主義はどのような理由によって発生し、そしてそれはどのような最終地点に帰着するのであろうか。この問は、地球規模での問題群が私たちに提起している問であり、資本主義みずからがその解決を資本主義に生きる諸個人に迫っている問である。資本主義が私たち自身の産物であり、高次の自己の姿であり、必然的に再生産されているものであるかぎり、私たちは資本主義自身から新たな道を聞き出すことができるはずである。マルクスが資本主義を必然的な理由をもって生まれ、やがてその理由を解消して衰滅する「通過点」とよぶとき、それは対象把握に疎遠な価値観や、対象の外部の理念や、由来のみえないイデオロギーとしてではなく、私たち自身の疎外された自己の運動に内在する把握として語っている¹⁾。

彼は、労働による社会形成において資本主義が必然的な役割を遂行し、この遂行において自己を世界史の特殊な通過点として絶えず否定しつつ実現していることを資本主義の現在の運動自身からつか

みとり、諸個人を担い手とする資本主義自身の生きた総体としての自覚化のモメントとして理論的に開陳している。

資本は、それ自体はその本性からして局限されたものではあるが、生産諸力の普遍的な発展につとめるのであり、こうして新生産様式の前提となる。……この傾向は——同時に、一つの局限された生産形態としての資本自身に矛盾し、だからまたみずからの解体へと資本を駆り立てていく傾向なのであつて——、資本をそれに先行する一切の生産様式から区別すると同時に、資本は単なる通過点として措定されているのだ、ということとをうちに含んでいるのである。（『経済学批判要綱』）

労働の社会的生産力の解放された、自己目的化した発展こそが資本の諸世紀を特徴づける。生産力の「普遍的な発展」に自己を駆り立てる資本の「傾向」は、自己自身の局限性と矛盾し、資本の発展は不断に自己解体的である。資本の絶えざる蓄積の永久性は仮象で

あり、蓄積はその自己矛盾する運動において資本主義自身の有限性を告知している。自己において矛盾する存在として自己を徹底して展開することにより、資本主義は自己の止揚へと突き進む「新生産様式的前提」として現われる。

……資本がはじめて、市民社会を、そして社会の成員による自然および社会的関連それ自体の普遍的取得を、つくりだすのである。ここから資本の偉大な文明化作用が生じ、資本による一つの社会段階の生産が生じる……。〔『経済学批判要綱』〕

…資本の制限とは、この発展の全体が対立的に行われる、ということ、そして生産諸力、一般的富等々、知識等々を作り出すことが、労働する個人自身が自分を外在化させるというかたちで、すなわち彼が、自分のなかから作り出した(生産諸力等々)にたいして、自分自身の富の諸条件にたいする様態ではなく、他人の富の諸条件、自分自身の貧困の諸条件にたいする様態で関わるというかたちで現われる、ということなのである。けれども、この対立的形態そのものが瞬時的なものであって、自己自身の止揚の實在的な諸条件をつくりだすのである。結果は次のとおりである。生産諸力——富一般——が土台として、この形態の傾向と可能性から見て、一般的に発展すること、同じくまた、土台としての、交易の普遍性、それゆえ世界市場。この土台が個人の普遍的発展の可能性として、そしてこの土台から生じる、諸個人の現実的發展が、自分たちの制限……の不

断の止揚として。〔『経済学批判要綱』〕

資本は「地球全体を自己の市場として」⁵ 創出する。世界市場は資本の世界市場であり、資本はそこで生産力の発展に邁進する自己の存在理由を地球的に証しつつ、矛盾としての自己の人類史的な特別の意義をその極点に達するまで徹底するであろう。この自己矛盾する発展の線上に資本主義は自己を超出する、矛盾を解消する安定した総体に変換するにちがいない。資本という対立性は「瞬時的」であり、労働する諸個人の普遍性の他者における形成は、対立性をとおして、資本主義が自己を「止揚」する「實在的な諸条件」を絶えず結果する。資本がもたらす世界市場は「諸個人の普遍的発展の可能性」の発展であり、世界的諸個人の対立的な實在化にほかならない。

ブルジョア社会の本来の任務は、世界市場を作りだすこと(少なくともその輪郭だけでも)であり、その基礎にもとづく生産を作りだすことだ。(マルクスのエンゲルス宛の書簡、一九五八年一月八日)⁶

歴史のブルジョア時代は、新世界の物質的基礎をつくりださなければならぬ。——一方では、人類の相互依存にもとづく世界的交通とこの交通の手段、他方では、人間の生産力の発展と、物質的生産を自然力の科学的支配に転化すること、これがその基礎である。(『イギリスのインド支配の将来の結果』)⁷

世界市場では、すべての人々との個人の連関は、他方では同時にまた諸個人それ自身からのこの連関の独立性は、この連関の形成が同時にそれ自身からの移行の条件をもすでに含んでいるほどの高さにまで発展を遂げているのである。（『経済学批判要綱』）

資本のもとでの生産力の発展、資本としての諸個人の普遍性の対象化は、人間を手段にする、諸個人にたいして疎遠な客観的目的の实行であり対立的であり、自己における対立、矛盾である。人間諸個人が自己の外部として現われる力に服属し、対立的に実現するこの疎外された発展は、ゆえに、単なる外部からの侵食ではなく、自己の疎外であり、自己の普遍性の対象化である。資本における生産力の発展は、自己の対立における人間の、自己の生産力の発展を意味する。

……人間がつねに生産の目的として現われている古代の考え方は、生産が人間の目的として現われ、富が生産の目的として現われている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるかのように思われるのである。しかし、実際には、偏狭なブルジョアの形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によってつくりだされる、諸個人の欲求、諸能力、諸享樂、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであるか？……この歴史的發展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、そ

の自己目的にしているのではないのか？（『経済学批判要綱』）

……このような転倒は、富そのものの創造を、すなわち、ただそれだけが自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働の無容赦な生産力の創造を、多数者の犠牲において強要するための、必然的な通過点として現われる。このような対立的な形態を通らなければならないのは、ちょうど、人間が自分の精神的諸力をまず第一に自分に対立する独立な諸力として宗教的に形づくらなければならないのと同じことである。それは人間自身の労働の疎外過程である。（『直接的生産過程の諸結果』）

人間の自由な発展の基礎を築く生産力の創出を、資本主義は人類史的自己疎外の最高点として、転倒的に遂行する。資本という自立的物象の自己目的運動を介して、労働の自己疎外が創造するのは労働の世界的な生産力である。資本という他者の力における社会的労働發展の無慈悲な追求は、対立的な外皮にくるまねながらも、自由な社会状態の前提を形成する。資本主義という対立的形態を突破して、生産力の発展が、自然に働きかける人間の発展であり、人間自身の自己の発展、自然の人間の形態の展開であることを現さねばならない。

2 資本の蓄積欲求の実現

——労働する諸個人による民主主義の普遍化へ

諸個人は自己の対象世界から分離し、自己の総体性を疎外するの

であるが、しかし、他者である資本が無自覚的に創出する総体性は諸個人の存在根拠の形成である。諸個人は、資本の諸連関として形成された地球的な労働の生産力に依存することによって、転倒しつつもそれを自己の延長にとらえている。孤立しあう諸個人の人格的形態は、その地盤として「交換価値」の支配する物象的連関を形成し、それが「全自然の探究」「地球の全面的な探究」「自然科学の最高度までの発展」¹¹を実現するシステムを形成する。

物象的な依存性のうえにきざかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求と、普遍的諸力能といったものの一つの体系が形成される。(『経済学批判要綱』¹²)

個別的生産過程を孤立的過程から世界的過程の諸器官に転換していく世界市場として創造された対象世界に連動して諸個人の生命過程は世界的であり、資本の対立性は世界的な問題群として彼らに資本の止揚を、資本として発展する彼ら自身の生産力を彼ら自身の生産力として制御することを求める。資本主義は「諸個人の世界史的存在」¹⁴を生みだし、諸個人を「世界史的な、経験的に普遍的な諸個人」¹⁵という主体へとつくりあげる。

プロレタリアートは……世界史的にしか存在しえない……。
(『ドイツ・イデオロギー』¹⁶)

生産諸力にたいして大多数の個人が向きあっており、この諸力は彼らから引き離されて、それゆえに、彼らはあらゆる現実的な生活内容をうばわれて、抽象的な諸個人になってしまったのだが、しかし、このことによってはじめて、彼らは、諸個人として相互に結合することができる境遇におかれるのである。(同上書)¹⁷

資本主義の前提である二重の意味で自由な労働者は、労働の客体的諸条件から分離し、自己の対象的内容を喪失し、孤立化し抽象化しているが、それによって彼は自然発生的共同性の依存の鎖から自立した抽象的にはあるが自由な法的な人格であり、自覚的に能動的に社会的連結を結ぶことが可能な能動的・主体的な存在になりうる。対象的内容を自己に対立する資本の世界としてつくりだすことによつて、彼らは、他者のなかに、みずからの自由な発展の土台を見いだし、それをまさに自由な発展の土台として制御しようとする。抽象的な諸個人、疎外された諸個人は対象世界に對立的に向きあうことでその抽象性をみずから否定し、自由に自覚的に、自発的・積極的に協同する社会的主体として、彼らの対象世界である社会的労働の生産力を制御しようとする。資本として能動化した制御されざる社会的内容を自由な諸個人がその自覚的な連帯・結合のもとに包摂しようとする。

「民主主義」「デモクラシー」とよばれるものななかみは、諸個人の自覚的な結合である。「民主制は人間から出発して、国家を客体化された人間たらしめる」(『ヘーゲル国法論(第二六一節―第三一三

節）の批判¹⁸。自然発生的な世界的生産過程を民主的に協同する諸個人が制御すること、先進的で民主的な労働する諸個人の協同のもとに世界的生産力を制御することとおして、諸個人は「他人の富の諸条件」に疎外された自己の諸条件を自己の諸条件に変え、役割を終えた資本という生産のありかたを止揚するであろう。

労働する諸個人が民主主義的制御による包摂を世界的に有機的に発展した生産過程に及ぼすこと、労働する諸個人による民主主義的協同が徹底され普遍化することが、資本の生みだす成果の主體的形態と客體的形態の統一として資本主義の自己超出を実現するはずである。社会をつくりだす自覚的な存在としての諸個人のもとに、自然発生的に資本が担ってきた、彼ら自身の生産的土台である労働の個別性と普遍性の媒介が現実化するであろう。

『資本論』第一部第七篇第二章は、資本の蓄積における現在の矛盾する運動をとらえる。ここに、私たちは、抽象的諸個人の危機として現れた、先進的で民主的な労働する諸個人による生産過程の制御という主題を読み込むことができる。

現代世界は資本主義という生きたシステム、社会的生産有機体を本体とする。社会的生産有機体は、対象世界（自然・社会）にたいして、自己の有機的延長として自己の普遍性の対象化として関わる人間を根源的な主体とする。この主体である労働する個人の矛盾、自己における矛盾が彼に対立する総体を形成し、この総体が生産関係の物象化のシステムとして諸範疇を分化し運動している。

資本主義は商品のシステムの否定的な自己実現である¹⁹。商品は、排除しあう私的諸労働への社会的労働の解消と、社会的労働への私

的諸労働の統合を担う実体である。労働は私的な社会的労働として、その社会的性格を商品に対象化している。単純流通 $W—G—W$ にたいして、 G を起点とする循環として自己を保持し増大する生きた貨幣が存立する。これが資本であり、貨幣の資本への不断の転化により、それは実現している。この転化の要をなすのが、二重の意味で自由な労働者の存在、すなわち、生産手段から分離し、かつ法的に自由である労働者の存在である。資本は、買い物によるその消費（使用価値の実現）が一日の労働であるような商品すなわち労働能力 \parallel 労働力を彼から購入し、自己の過程に包摂する。

$G—W—G$ の秘密は、一日の労働が対象化する価値が、資本家が対価を払う労働力の日価値よりも大きい点にある。労働力商品の価値を規定するのは、労働者が消費する必須生活手段の生産に要する必須労働時間であるが、資本家による私的消費過程における労働力の使用はこれに限定されず、剰余労働時間による剰余価値の対象化がこの消費過程内で秘密裏に進行する。

『資本論』第一部における「剰余価値の生産」は、一回の過程の把握であった。「労賃」においては、この過程の産物である剰余価値がその源泉を隠蔽されて現われる。「労賃」形態は、労働力の価値または価格から分離して、労働者の受けとる貨幣が「労働の価値または価格」という法的形態をまとった姿である。「労賃」は、生産過程から独立化した、交換過程の仮象的な自己完結である。物神的形態のこの完結は、必須労働時間と剰余労働時間の区別を消し去り、ここでは、労働者と資本家は自由で平等という法的規定が貫かれる存在として現われている。労働者が対象化した価値は、生産という根拠

から孤立化し、「労賃」「利潤」という架空の源泉を付与された物神的形態をまとっている。

「労賃」に続く『資本論』第一部第七篇「資本の蓄積過程」が把握するのは、資本という物象的能動性がまとう正当性形態の破綻である。²⁰ 第二章「単純再生産」と第三章「剰余価値への資本の転化」をみてみよう。

一回かぎりの生産過程にたいして、その反復においてとらえられた再生産をみると、巨大な反転が現われる。「この単なる繰り返しまたは連続がこの過程にいくつかの新しい性格を押印する」(『資本論』S.592)。²¹ 自己再生産する資本主義総体がいかに自己否定的に自己を媒介しているのか。商品のシステムとしての資本主義の把握の要はこれにつぎるといってよい。

剰余価値を資本家が消費して投下資本額が同一であれば、生産過程が同一の規模で繰り返される単純再生産である。この部分は、剰余価値を資本に転化する資本の蓄積の基礎をなしている。

不断の更新においては、労働力に投下される可変資本が、資本家のファンドであるとする外観が消え、労働者自身の労働ファンド、生活手段のファンドの形態にすぎないことが明らかとなる。資本家の自己労働を想定した総資本もまた、他人の剰余労働の対象化に転化する。たとえば、剰余価値二〇〇ポンドを毎年消費する資本家が、彼のもつ一〇〇〇ポンドを前貸資本とするならば、この資本価値一〇〇〇ポンドは五年を経たのちには、彼が食い尽くした価値の等価となる。資本家が消費した剰余価値総額が、前貸資本価値の等価に達し、彼が労働することなく無償で取得し消費した剰余価値総額を

資本が代表する。

労働する諸個人が自己の客体的諸条件から分離している疎外は、資本の基礎であるが、それもまた資本の過程自身の産物として現われている。「彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のものとなれ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかで絶えず他人の生産物に対象化される」(S.596)。事実として与えられた二重の意味で自由な労働者の存在が「特有の結果として絶えず繰り返し生産され永久化される」(S.595)。労働者による自由な個人的消費も、資本から排出された生活手段が労働力に転化する資本の再生産の契機をなす。労働者は直接的生産過程の外でも資本の付属物である。労働力とその客体的諸条件の分離を資本は再生産する。孤立した交換では、労働者と資本家の相対は偶然にすぎない。ところが、不断に流れる過程の総体においては、労働力販売は強制として現われ、資本家の側では他人の労働の産物が無償で消費ファンドに転化している。

剰余価値のうち資本家の消費ファンドではない部分は、追加資本に転化し、資本蓄積を実現する。追加資本が取得した剰余価値は、さらに追加資本に転化し、「過去の不払労働の所有」(S.609)が、拡大する規模での他人労働の無償の取得の条件となる。蓄積を導いた原資本による交換は、また一つ一つの交換それ自体は、等価交換であり、自由で平等な私的所有者という法的人格の規定を交換者は受けとっている。資本家の私的所有は自己労働が想定されている。しかし、流れにおいて事態は一転する。²² 労働力と交換される資本部分は無償で取得した他人労働の産物であり、これは再び剰余価値を取

得して補填される。私的所有は「資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利」に、「労働者の側では彼自身生産物を取得することの不可能」に転化し、交換の外観を解消する。これが商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転回である。蓄積が前提する交換は、孤立的には自由な私的所有をそれ自身の尺度とするが、蓄積において拡がる流れの契機として私的所有は承認される権利という承認において、自由な私的所有とは正反対の内容を不可避的に露出する。労賃の物神的形態は破綻し、本質であった関係が現れ出る。²³

3 地球規模での普遍的世界と社会的諸個人の形成 ——現代民主主義による変革の立脚点

第二章と第二章の内容の中心部を確認した。商品のシステムとしての資本主義の実現は、社会的生産実体を機動力とする資本蓄積と、資本の前提である自由な私的所有という相互承認との相互批判として、資本主義の自己批判である。資本主義は発展するがゆえに自己批判する。

資本主義のこの正当性破綻は、生産過程を労働する諸個人が自己の環境として認識することを意味する。孤立した交換の合法的形式から分離して、過程の総体は労働する諸個人自身の環境であることを示している。

すでに相対的剰余価値論において人権は労働する諸個人の人權として具体化しており、大工業という内容に即して、デモクラシーが生産過程を制御する方向に発展することが示唆されていた。それを

ふまえて前節で確認した「転回」論はデモクラシー／民主主義の現代的徹底を把握している。諸個人が対象から引き裂かれた自己として現われることは、デモクラシーの起点であった。生産手段と共同体を喪失する代わりに自己のみを諸個人は世界の根拠として自覚する。抽象的ではあるが、まさに抽象的であることによって、諸個人は自己を自覚し、自己を対象世界の形成者として自覚しうる。資本主義がつくりだす社会的生産は、この主体に対立する他者として、物象の世界として形成された対象世界である。転回とは、この対象世界を他者における自己の世界としてデモクラシーの主体に対面させ、デモクラシーの陶冶を導くことである。

単純につかまれた貨幣諸関係のなかでは、ブルジョア社会の内面的対立がすべて消し去られたようにみえ、またこの面からして、ブルジョア経済学者によつて現存の経済的諸関係を弁護するための逃げ場とされる以上に（かれらはこのばあい少なくとも首尾一貫して、交換価値と交換という、貨幣関係以上に単純な関係にさかのぼる）、ブルジョア民主主義によつて、この貨幣関係がふたたび逃げ場に使われるのである。（『経済学批判要綱』²⁴）

再生産の媒介から分離した「貨幣諸関係」の抽象性、抽象化された交換の諸関連にとどまり、労働する諸個人を蓄積の手段として消費する資本の「内在的対立」を隠蔽することがデモクラシーの物神崇拜的制限性である。諸個人の自由な自発的な社会形成原理として

のデモクラシー一般に対する嘲笑という知的・実践的退廃はこの幻想的形態か、その裏返しにすぎない。現実総体の自己疎外、分裂をつかむことなく、民主主義一般を捨て去ろうとするのは、物神性に囚われた思考である。現代デモクラシーは労働する諸個人が資本の生産諸力・諸関係を真に普遍的な自己に転換するための関係であり運動である。

資本主義は絶えずその市民諸個人の人権という建前を裏切り全体を主体化させてしまう。労働する諸個人がこの敵対的な全体の方として現れる人間諸個人の自然的・社会的諸力を自己のもとに包摂しようとする闘いは、労働する市民の人権の発展として現われる。労働する諸個人は、市民革命の崇高さを受けつぎ、表現の自由など市民的な権利を擁護し発展させようとする。労働する諸個人は、労働日の法律的制限や社会保障の権利などに人権を具体化する。資本の大工業において、その社会的一体性を資本の力に疎外している人民は労働する諸個人であり、市民革命の革命的精神と対立し、そこに包摂されるべき対象はいまや企業社会である。資本とその世界を、すべて労働する諸個人の対象化された自己として暴き出すのが「転回」であった。

抽象的なデモクラシーはその抽象性という限界を露呈し、生産過程が形成する自己の対象世界をその対象として、発展するデモクラシーへと転換する。民主的で先進的な労働する諸個人の実践的な陶冶として民主主義／デモクラシーは徹底される。²⁵ 現代の労働する諸個人のデモクラシーという、疎外された労働する諸個人がそこで実践的に陶冶される自由な連合において、対象的世界のすべてが労働

する諸個人の対象的自己であるという人類史の真理が変革の根拠として総括されているといえよう。私的所有の下で対立的に成長した社会的労働・社会的生産手段、世界的交通を前提して、世界的デモクラシーの徹底線上に自由な人間社会が狭隘な外皮を破って形態化するであろう。²⁷

4 人権・労働・環境

— グローバル・デモクラシーの展開

資本のもとでの生産の発展は、労働する諸個人の社会的生産の対立的な形態における発展であり、対立的形態を脱して諸個人の自由な発展の真の基礎に転換・現実化すべきものである。マルクスは、一八七〇年のイギリスを資本主義が全産業に浸透し、世界市場を支配するまでに成熟した唯一の国ととらえ、イギリスに成熟した生産の諸条件をイギリス人だけのものではなく万人が共有すべき、万人が奪回すべき変革の諸条件として考えていた。

イギリスは……その世界市場の支配によって、その経済関係におけるどんな革命も、直接に全世界に作用を及ぼさざるをえないただひとつの国である。地主制度と資本主義がこの国にその古典的な本拠をもつていとすれば、他方ではこれを破壊する物質的諸条件がここで最も成熟しているわけである。……これをイギリス人だけの手にゆだねるのは、なんと**い**うばかりか**こ**とであろう。イギリスはたんに他の諸国とならぶ国として扱われるべきではない。——イギリスは資本の本国として扱われる

べきである。……（総評議会からラテン系スイス連合評議会へ）²⁸

発展した資本は一国民のものではなく、万国の労働する諸個人が奪還すべき普遍的な力である。「ブルジョア時代の成果である世界市場と近代的生産力をわがものとし、これらをもっとも先進的な諸国人民の共同管理のもとにおいたとき」、資本の形式でつくりだされた普遍的なものは諸個人自身の普遍的なものに、進歩は諸個人を犠牲にする敵対的な形態におけるものから諸個人自身の進歩に転換する。

資本主義のつくりだすグローバリゼーションが資本の内面的矛盾の展開であり、容赦のない疎外の過程であることはいうをまたない。

これまでブルジョアジーは、個人をも全人民をも、血と泥のなか、悲惨と墮落のなかを引きずることなく、一つの進歩でもなしとげたことがあるか？（「イギリスのインド支配の将来の結果」）³⁰

人間・自然を犠牲にする人間・自然の発展は狭隘な通過点であり、それを突破して悲惨による進歩、敵対的な進歩を人間自身の進歩に転換するのも、自己疎外している人間自身にほかならない。労働する諸個人が彼らを覆う局地的な共同的なヴェールを剥がされ、資本の付属物へと徹底的に解体される悲運が、彼らを普遍的な人類社会に実践的に関心を有する世界的な主体へと転換していく。

もし産業革命がおこらなかつたとすれば、たしかにきわめてロマンティックで情緒に富んではいたが、人間にはふさわしくなく、彼らはまさに人間ではなく、これまで歴史を導いてきた少数の貴族に奉仕する働く機械にすぎなかつた。産業革命は、このような状態からの帰結を徹底的におしすすめたにすぎないのであつて、労働者をただの機械にまったく変えてしまい、労働者の手に残されていた独立的な活動の最後の残りかすまで奪い去つたが、まさにこうすることによって、労働者にたいしてものを考え、人間的地位を要求する刺激をあたえたのである。一般的な人類の利害にたいして無感覚となつていた最後の階級を歴史の渦中にまきこんだものこそ、フランスでは政治であつたように、イギリスでは工業とブルジョア社会一般の運動であつた。（エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』）³¹

資本のもとの大工業が、労働する諸個人を「人間」として目覚めさせ、自覚的に結びあう連合の力によって、諸個人は資本の壊滅的影響を制限しようとする。彼らを剰余価値を生む物として消費し、蓄積の材料として直接搾取される群と予備軍に分割し、貧困を蓄積する資本の飽くなき拡大欲求が、彼らを「ものを考え」連帯する諸個人へと社会化する。資本のグローバリゼーションの力として対立的に形成されているのは、諸個人の非有機的体としての対象世界であり、この諸個人自身の自然・社会の力を諸個人の制御のもとに包摂するべく、諸個人の連帯もまたグローバルでなければならぬ。³²

資本主義は連帯する「万国の」自由な労働する諸個人を生み出すのである。

資本主義が産出する客体的な人類史的獲得物は、私的所有を前提しつつそれを止揚する形態である、大工業における科学を適用した社会的生産手段と社会的労働組織の体系、および、諸資本の連動する世界的な交通、世界市場であり、主体的な形態の成果は、自由に社会化する人間、世界的に結合し自由に「ものを考え」行動する労働する諸個人の階級にほかならない。資本主義が生み出すのは、自由な労働する諸個人と社会的生産に立脚したその民主主義的・自覚的社会的連合なのである。世界的なデモクラシーを担う労働する諸個人を資本主義は必然化することにおいて、資本主義はみずからを解消しつつある通過点なのであるともいってよい。

資本主義は、人権とデモクラシーの主体である諸個人にたいして、資本主義の問題として社会的・世界的生産過程を、民主的に協同管理すべき公共性として公開し、諸個人を自覚的な社会的諸個人として陶冶する。この世界的な諸個人に対して転倒的な客体的世界としての資本が現象するのは、地球規模での三つの問題群、すなわち「人権」「労働」「環境」である。³⁴ これらの問題群として資本主義の問題が民主的に解決すべきものとして公開されているのである。

この三つの問題群は、関連のない孤立した主題ではなく、有機的な統一に帰しつつ浮上する同一の問題にほかならない。資本がその物神的神秘化から飛び出してその対立性、転倒的能動性を民主的な諸個人の意識に対して露出している問題である。これら三つの分野に現われているのは、蓄積のための蓄積、成長のための成長の限界

であり、敵対的利害の運動に収奪されている私たちの世界のありようと、その解決に向けて先進的諸人民の国際的合意が不断に形成され、国際的管理が試みられていることにほかならない。

「企業と人権」として意識される問題においては、人間の尊厳、自由な諸個人としての社会的承認を企業という現実的な社会的労働組織において実現することが課題となっている。資本に成立した実態としての公共空間、人々の共同的な空間を、社会の主人公である諸個人の協同の土台に、真に諸個人が自由な結びあう世界に転換するという根源的な課題がそこには現われている。超国籍企業の社会的責任(CSR)³⁵などの形で企業が人権保障の義務を負うのも、人権が抽象的な「政治的解放」³⁶の空間から、現実世界の対立的な窠である市民社会、経済世界における武器にまで具体化していることを意味する。「企業献金」においては、自由な諸個人の政治的結合、共同体権力の人民主権による掣肘にたいして、社会的生産の力が資本の増殖の力として現われ対立している。これも「取得法則の転回」の問題圏を示す現象である。企業において社会的生産過程が私的所有に疎遠に実体的な公共性として露出しているがゆえに、人権・労働・環境が企業の社会的責任としても問題化している。労働する諸個人の自己の環境として社会的生産過程を管理することが実践的な課題となつているのである。

資本主義は、諸個人から自然と社会という対象を奪うことによつて、彼らを局地的な自然と共同体の小宇宙に埋もれた有機的客体の器官から、内容から引き離された抽象化された人間に解体し、そのことによつて彼らを自覚的に連合しうる諸個人に転換した。つきに、

資本主義は、自由になった労働力を集中し社会的生産手段に結合する資本の力として、諸個人の社会的生産という土台を急速に発展させ、諸個人の民主的制御の対象として現実の生産過程そのものをつくりだす。資本主義は、抽象的な形でデモクラシーを成立させ、社会的労働の対立的発展によってそれを陶冶する。

「児童労働」「強制労働」においては、交換における自由な法的主体性という外観すら突破して物象的生産関係が露出し、搾取が露呈している。これらを廃絶しようとする国際的な取り組みも、「すべての人にディーセント・ワークを」という国際機関における合意形成とその実現のための努力も、労働の世界化に不可欠であり、資本に対して世界的なデモクラシーの網をかける試みである。

資本の文明的な面の一つは、資本がこの剰余労働を、生産力や社会的関係の発展のためにも、またより高度な新形成のための諸要素の創造のためにも、以前の奴隷制や農奴制などの諸形態のもとでよりもより有利な仕方と条件とのもとで強要するということである。（『資本論』第三部）³⁷

諸個人の自由な時間を創造する可能性をもたらす大工業の発展は、その資本主義的実現において、諸個人の時間を収奪する他人の富の発展であり、この資本の力の展開が諸個人の環境を収奪、破壊している。³⁸ 資本の剰余労働への渴望は、持続可能な環境の維持・形成ではありえない。労働問題と環境問題は別々の問題ではない。諸個人を価値増殖運動に吸収する、貨幣のための貨幣の増大³⁹という悪

無限的な成長の、蓄積のための蓄積の限界が露呈しているのであり、物象・資本の無政府的運動に発展をゆだねるシステムの有限性が問われているのである。

いわゆる「地球環境問題」は、人間一般とその外部の自然の関係などではなく、資本主義として実現した経済総体が諸個人の自己の環境として制御すべき対象であることを示すのであり、地球規模での労働問題と同じは同一の問題である。⁴¹

課題はトータルなものとして立てられている。資本が人権・労働・環境と表象される世界を自己の運動に対立的に統一し、世界から地域へ、地域から世界へ有機的に自己を形成することに即して、デモクラシーもまた統一的で有機的なものとして発展しなければならぬ。

テクノロジーや市場の拡大がすべてを解決すると考える無思想は、成長主義として現われた膨張しつつける貨幣への物神崇拜にすぎず、反テクノロジー・反市場という空想も、グローバリゼーションを外部ととらえて周辺や局地を対置する二元論的主張も、現象に現われた矛盾を見ているにすぎず、諸個人の自由な発展の確固とした物質的諸条件の生成を矛盾としてつかむことがない。労働する個人の自己矛盾に定位し対象の生きた矛盾を把握するマルクスの批判的現代認識は生きた総体性に発展する対象の自己を把握する。

プロレタリアートの一部は、交換銀行や労働者協同組合のような、空論的な実験に熱中する。つまり、古い世界自身のもつている巨大な手段をすべて使って、この古い世界を変革すること

をあきめて、むしろ社会のうしろで、個人的に、プロレタリアートの限られた生存条件の範囲内で、プロレタリアートの救いをなしとげようとする運動、したがってかならず失敗するにきまつている運動に、熱中する。(『ルイ・ボナパルトのプリュメール一八日』⁴³)

……ブルジョア社会、つまり交換価値に立脚した社会の内部でつくりだされる生産諸関係ならびに交易諸関係こそは、同時にまた、それらとちょうど同数の、ブルジョア社会を爆破するための爆弾ともなるのである。(『経済学批判要綱』⁴⁴)

資本主義とは、人類社会の産みの苦しみの総括であり、自己を止揚しつつある過渡的なシステムである。資本主義の限界を指し示す問題群として、人権と民主主義の展開、労働問題、地球環境が与えられ、この人類史的課題の解決としてマルクスのとらえた人間解放の運動が現代に生きている。端的にそれは、無政府的なグローバルゼーションにたいして、民主的な協同的制御の網をかけ、資本の物象的力としての諸力の敵対的発動を永眠に導く運動である。世界市場に総体化した資本を総合的な計画性のもとで制御の網に包摂し総体的に調整・運転するデモクラシーの徹底をとおして、社会的生産過程の協同的管理をとおして、労働する諸個人の普遍性がその総体的疎外において資本の力として発動する転倒を止揚することが真にグローバルな課題である。

資本主義の自己否定の終了、新たな生産のありかたへの転換は、

総体的である。法、国家、銀行などの社会の諸関係はそれ自体孤立的に現われるが、資本主義の自己形態として資本主義という自己にとらえられて必然的に存立する。資本主義の総体性を前提しているその諸器官の孤立の変更の試みは「かならず失敗するにきまつている運動」である。そのブルードン批判において明らかのようにマルクスが一貫して批判するのは、労働者の銀行によって商品が貨幣・資本に転化するのを防ごうとするブルジョアの幻想であり、幻想的な出发点として現われる所有関係を変革することで社会を変革する試みであり、姿態の変革が生きた社会総体を変革できるかのようにとらえる幻想であった。

資本主義の到達点は、主体の形態としては、矛盾において民主主義を發展させている自由な個人(普遍的な人権)であり、客体としては、矛盾として深化する世界的な交通・流通(世界市場)、矛盾として發展する世界的な生産(社会的労働と社会的生産手段)であった。成長主義を乗り越えるトータルな変革への道は、この到達点を土台にすることよつてのみ切り開かれる。貨幣という物象を原理とする現在の持続不可能な、成長主義的システムから、人間そのものを原理とするシステムへと巨大な転換が必然化している。対象世界を人間が自己に有機化する運動を搾取しながら生産のための生産、蓄積のための蓄積を無慈悲に遂行する成長主義、資本の自己増殖による發展から、世界的な生産と市場を自由で民主的な諸個人が協同的に制御し、自覚的な發展の基盤に転換することが、現代の課題である。

- 1 対象における対象の発生を把握すること、対象を自己として把握する「存在主義」がヘーゲルを批判的に継承したマルクスの労働論の意義であり、その資本主義把握は、疎外された労働論・生産関係の物象化論・私的所有の正当性破綻論として実現する矛盾論的システム把握である。マルクスのこの包括的な学問的意義を復権する作業は、有井行夫『マルクスの社会システム理論』有斐閣、一九八七年、同『株式会社の正当性と所有理論』青木書店、一九九一年、同『マルクスはいかに考えたか——資本の現象学』桜井書店、二〇一〇年、など。現在の自己(生きた総体性)の矛盾する運動がその止揚を、将来の媒介的な統一を指示するのであり、マルクスは資本の現在が語る人類史を理論的にとらえた。マルクスの人類史把握が矛盾としての現在を中心に本源的統一としての過去と媒介的統一としての未来という三段階論であり、これが労働・物象・人格のシステムという存在層に即して三つ提起される点は、有井、前掲『マルクスはいかに考えたか』二二六—二二七頁、同『株式会社の正当性と所有理論』二六七—二七〇頁。マルクスの未来社会把握は、疎外された労働というシステムの発生日における本質的矛盾に立脚しており、対象に外在的な理想などではない。大谷禎之介『マルクスのアソシエーション論——未来社会は資本主義のなかに見えている』桜井書店、二〇一一年、八一—八三頁。「資本主義の胎内に社会主義がはらまれている」(山口正之『社会経済学』なにを再生するか』青木書店、一九九四年、二二八頁)。
- 2 MEGA (Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe) II/1.2, 1981, S. 438. 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』一八五七—一八五八年の経済学草稿』大月書店、一九九三年、二一六—二一七頁。以下、マルクスからの引用にさいし、訳文は、原文の強調を省くなど断りなく若干手を入れる場合がある。引用文中の……は引用者による省略を意味する。
- 3 Ebd., S. 322. 同上邦訳書、一七—一八頁。
- 4 Ebd., S. 439—440. 同上邦訳書、二二—二九頁。
- 5 Ebd., S. 438—440. 同上邦訳書、二二—二六頁。
- 6 MEW (Karl Marx - Friedrich Engels Werke) Bd. 29, 1963, S. 360. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクスIIエンゲルス全集』第二九巻、大月書店、一九七二年、二八—二九頁。
- 7 MEW Bd. 9, 1960, S. 226. 『マルクス・エンゲルス全集』第九巻、一九六二年、二七—二八頁。
- 8 MEGA II/1.1, S. 94. 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』一九八一年、一四四頁。
- 9 MEGA II/1.2, S. 322. 『資本論草稿集』一三七一—一三八頁。
- 10 MEGA II/4.1, S. 65. 岡崎次郎訳、国民文庫、一九七〇年、三二—三三頁。
- 11 MEGA II/1.2, S. 321—322. 『資本論草稿集』一七頁。
- 12 MEGA II/1.1, 1976, S. 91. 『資本論草稿集』一三八頁。
- 13 「大工業は世界市場をつくりだした。……ブルジョアジーは、歴史上きわめて革命的な役割を演じた。……ブルジョアジーは、世界市場の開発をつうじて、あらゆる国々の生産と消費を全世界的なものにした。……昔の地方的、また国民的な自給自足や閉鎖に代わって、諸国民の全面的な交通、その全面的な依存関係が現われてくる」(『共産党宣言』MEW Bd. 4, 1959, S. 463—466. 『マルクス・エンゲルス全集』第四巻、一九六〇年、四七七—四七九頁)。
- 14 渋谷正編・訳『草稿完全復刻版 ドイツ・イデオロギー』序文・第一巻第一章』新日本出版社、一九九八年、六九頁。
- 15 同上邦訳書、六七頁。
- 16 同上邦訳書、六七—六九頁。
- 17 同上邦訳書、一六六—一六七頁。
- 18 MEW Bd. 1, 1956, S. 231. 『マルクス・エンゲルス全集』第一巻、一九五九年、二六三頁。
- 19 有井、前掲『マルクスはいかに考えたか』は、疎外された労働、商品、二重の意味で自由な労働者という主体の関係運動(三つの「ルーブ」)の記述として『資本論』をつかんでいる。『資本論』は疎外された労働を前提しつつ、直接の出発点である商品が自己の前提を規定する生きた関係の把握である。
- 20 「労賃」形態における物神的形態の完成と、単純再生産・拡大再生産

- がそれを破綻させる意義については、とくに、有井前掲『株式会社の正当性と所有理論』二五四―二六〇頁。
- 21 以下、『資本論』第一部第七篇(MEW Bd. 23b, 1962: 『マルクス・エンゲルス全集』第三卷第二分冊、一九六五年)からの引用に際しては、本文中に丸括弧で原典頁番号を記す。
- 22 「過程の連続において事態を把握することは、商品交換の個人主義的視野の提起する内容にそくしてこれを突破して、階級的・社会的連関において把握することである」(有井、前掲『株式会社の正当性と所有理論』二五八頁)。
- 23 「転回」論は、「私的姿態」(「承認の抽象性」と「社会的姿態」)、「搾取」「非承認性」との「相互批判」として「資本のシステム」の「自己批判を先遂でぎずに自己批判をつづける存立」をとらえる(有井、同上書、二六四頁)。
- 24 MEGA II/1.1, S. 162-165: 『資本論草稿集1』二七五頁。
- 25 民主主義の具体化は、有井、前掲『株式会社の正当性と所有理論』三四九―三五二頁。「内容的な民主主義の現実性は、その形成対象とする……: 相対する社会的なもの現実性に依存する」(同上書、三四九頁)。
- 26 「諸資本は……: 諸資本の公共性の形態化を、国際的公共性の形態化として実現しつつある」(同上書、三四八頁)。
- 27 「資本主義的発展のめつとも民主主義的形態」のための闘争のほかに、どこか純粋な『社会革命』のための闘争があるわけではない」(山口、前掲書、一七六頁)。
- 28 MEW Bd. 16, 1962, S. 386-387: 『マルクス・エンゲルス全集』第一六巻、一九六六年、三八〇―三八二頁。引用箇所につづけてマルクスは、アイルランドがイギリスの地主制の「堡壘」であり、イギリスとアイルランドのプロレタリアの「分裂」をイギリスのブルジョアジーが「その権力の維持の真の秘訣であることを知っている」と述べている(S. 387-388, 三八二―三八二頁)。「労働する諸個人の普遍的な団結の重要性が「グローバル化」の進む現在ますます高まっていることは、現在の「排外主義」の横行、諸個人の分断とファッショ的統合などに
- も明らかである。
- 29 「イギリスのインド支配の将来の結果」MEW Bd. 9, S. 226: 『マルクス・エンゲルス全集』第九巻、二一八頁。
- 30 Ebd., S. 224: 同上邦訳書、二一六頁。
- 31 MEW Bd. 2, 1957, S. 239: 『全集』一九六〇年、第二巻、二二二頁。「資本主義の『不安定』こそ、社会的発展を促進し、ますます多数の住民大衆を社会生活のうずまきこみ、彼らに社会生活の体制について熟考させ、彼らに自分で『自分の幸福をきたえる』ようにさせるところの巨大な進歩的要因であるという事実」(レーニン『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編『マルクス・レーニン主義研究所訳『レーニン全集』第二巻、大月書店、一九五四年、二〇五頁)。「強制される苦痛が、結合を自覚的連帯に発展させるをますます強く意識させる」(山口正之『経済科学におけるレーニン主義』汐文社、一九七三年、七一頁)。
- 32 「人間は原生的ゲマインシャフトの自然の楽園にもう一度立ち戻ることはできない。前に進んで全体的に発達した個人としての世界史的人間のために、自由な人間のために、たたかい抜くべきなのである」(山口、前掲『社会経済学』なにを再生するか、一三三頁)。
- 33 「資本主義的生産の主要事実」としてマルクスが『資本論』第三部第一五章であげているのは、対立的形態で私的所有と私的労働を廃棄する生産手段の集積と社会的労働の組織、そして世界市場であった(MEW Bd. 25a, 1964, S. 276-277: MEGA II/4.2, 1992, S. 339: 『全集』第二五a巻、一九六六年、三三三―三三四頁)。
- 34 システムの存在層に即した資本の露出を、地球環境問題、長時間労働、企業政治献金において示した、有井行夫『「物象化」と現代社会―マルクスの問題提起を考える』、『法経論集』(静岡大学)第三〇号、一九九四年三月。環境・労働・人権が、国際社会の課題として合意されているのも、それが資本の飽くなき増大が衝突する、自然と人間と社会の普遍的な場面の区別だからである。
- 35 国連や国際機関によるCSRのグローバルな制度化も、現代におけ

- る資本の自己否定的な展開である（小栗崇資「現代株式資本の自己否定性」『季刊 経済理論』第四卷第一号、二〇〇七年四月）。
- 36 『ユダヤ人問題によせて』（MEW Bd. 1, 1956 『全集』第一卷、一九五九年）における「政治的解放」から、「貨幣の力」を止揚する「人間的解放」へというテーゼを想起されたい。
- 37 MEW Bd. 25b, 1964, S. 827. MEGA II/4.2, S. 837. 『全集』第二五b巻、一九六七年、一〇五〇頁。
- 38 『資本論』第三部「三位一体的定式」における、労働日の短縮を諸個人の発展の土台とする「自由」の記述（MEW Bd. 25b, S. 828. MEGA II/4.2, S. 837-838. 『全集』第二五b巻、一九六七年、一〇五〇—一〇五一頁）。また、ケインズの「三時間労働」論（ケインズ「わが孫たちの経済的可能性」『ケインズ全集』第九卷、宮崎義一訳、東洋経済新報社、一九八一年、三九六頁）。
- 39 「富の蓄積がもはや高い社会的重要性をもたないようになると……財産としての貨幣愛は……半ば病理的な性癖の一つとして、見られるようになるだろう」（ケインズ、同上邦訳書、三九七頁）。
- 40 成長主義の行き詰まりとして資本主義の有限性をとらえた、久留間健『資本主義は存続できるか——成長至上主義の破綻』大月書店、二〇〇三年。
- 41 マルクスの『経済学・哲学草稿』の労働論を資本主義の批判的把握の拠点としてふまえた、山本孝則「現代資本主義社会の対立基軸としての『環境』——『環境』自己外部」論から『自己延長論』へ」『政経研究』第一〇三号、二〇一四年二月。
- 42 「小生産に対する大資本の進歩性の認知は、けっして『弁護』ではないということ」（前掲『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』二六三頁）。
- 43 MEW Bd. 8, 1960, S. 122. 『マルクス＝エンゲルス全集』第二九卷、一九六二年、一一五頁。
- 44 MEGA II/1.1, S. 92. 『資本論草稿集1』一四〇頁。

あり、蓄積はその自己矛盾する運動において資本主義自身の有限性を告知している。自己において矛盾する存在として自己を徹底して展開することにより、資本主義は自己の止揚へと突き進む「新生産様式的前提」として現われる。

……資本がはじめて、市民社会を、そして社会の成員による自然および社会的関連それ自体の普遍的取得を、つくりだすのである。ここから資本の偉大な文明化作用が生じ、資本による一つの社会段階の生産が生じる……。〔『経済学批判要綱』〕

…資本の制限とは、この発展の全体が対立的に行われる、ということ、そして生産諸力、一般的富等々、知識等々を作り出すことが、労働する個人自身が自分を外在化させるというかたちで、すなわち彼が、自分のなかから作り出した(生産諸力等々)にたいして、自分自身の富の諸条件にたいする様態ではなく、他人の富の諸条件、自分自身の貧困の諸条件にたいする様態で関わるというかたちで現われる、ということなのである。けれども、この対立的形態そのものが瞬時的なものであって、自己自身の止揚の實在的な諸条件をつくりだすのである。結果は次のとおりである。生産諸力——富一般——が土台として、この形態の傾向と可能性から見て、一般的に発展すること、同じくまた、土台としての、交易の普遍性、それゆえ世界市場。この土台が個人の普遍的発展の可能性として、そしてこの土台から生じる、諸個人の現実的発展が、自分たちの制限……の不

断の止揚として。〔『経済学批判要綱』〕

資本は「地球全体を自己の市場として」⁵ 創出する。世界市場は資本の世界市場であり、資本はそこで生産力の発展に邁進する自己の存在理由を地球的に証しつつ、矛盾としての自己の人類史的な特別の意義をその極点に達するまで徹底するであろう。この自己矛盾する発展の線上に資本主義は自己を超出する、矛盾を解消する安定した総体に変換するにちがいない。資本という対立性は「瞬時的」であり、労働する諸個人の普遍性の他者における形成は、対立性をとおして、資本主義が自己を「止揚」する「實在的な諸条件」を絶えず結果する。資本がもたらす世界市場は「諸個人の普遍的発展の可能性」の発展であり、世界的諸個人の対立的な實在化にほかならない。

ブルジョア社会の本来の任務は、世界市場を作りだすこと(少なくともその輪郭だけでも)であり、その基礎にもとづく生産を作りだすことだ。(マルクスのエンゲルス宛の書簡、一九五八年一〇月八日)⁶

歴史のブルジョア時代は、新世界の物質的基礎をつくりださなければならぬ。——一方では、人類の相互依存にもとづく世界的交通とこの交通の手段、他方では、人間の生産力の発展と、物質的生産を自然力の科学的支配に転化すること、これがその基礎である。(『イギリスのインド支配の将来の結果』)⁷

世界市場では、すべての人々との個人の連関は、他方では同時にまた諸個人それ自身からのこの連関の独立性は、この連関の形成が同時にそれ自身からの移行の条件をもすでに含んでいるほどの高さにまで発展を遂げているのである。（『経済学批判要綱』）

資本のもとでの生産力の発展、資本としての諸個人の普遍性の対象化は、人間を手段にする、諸個人にたいして疎遠な客観的目的の实行であり対立的であり、自己における対立、矛盾である。人間諸個人が自己の外部として現われる力に服属し、対立的に実現するこの疎外された発展は、ゆえに、単なる外部からの侵食ではなく、自己の疎外であり、自己の普遍性の対象化である。資本における生産力の発展は、自己の対立における人間の、自己の生産力の発展を意味する。

……人間がつねに生産の目的として現われている古代の考え方は、生産が人間の目的として現われ、富が生産の目的として現われている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるかのように思われるのである。しかし、実際には、偏狭なブルジョアの形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によってつくりだされる、諸個人の欲求、諸能力、諸享樂、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであるか？……この歴史的發展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、そ

の自己目的にしているのではないのか？（『経済学批判要綱』）

……このような転倒は、富そのものの創造を、すなわち、ただそれだけが自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働の無容赦な生産力の創造を、多数者の犠牲において強要するための、必然的な通過点として現われる。このような対立的な形態を通らなければならないのは、ちょうど、人間が自分の精神的諸力をまず第一に自分に対立する独立な諸力として宗教的に形づくらなければならないのと同じことである。それは人間自身の労働の疎外過程である。（『直接的生産過程の諸結果』）

人間の自由な発展の基礎を築く生産力の創出を、資本主義は人類史的自己疎外の最高点として、転倒的に遂行する。資本という自立的物象の自己目的運動を介して、労働の自己疎外が創造するのは労働の世界的な生産力である。資本という他者の力における社会的労働発展の無慈悲な追求は、対立的な外皮にくるまれながらも、自由な社会状態の前提を形成する。資本主義という対立的形態を突破して、生産力の発展が、自然に働きかける人間の発展であり、人間自身の自己の発展、自然の人間の形態の展開であることを現さねばならない。

2 資本の蓄積欲求の実現

——労働する諸個人による民主主義の普遍化へ

諸個人は自己の対象世界から分離し、自己の総体性を疎外するの

であるが、しかし、他者である資本が無自覚的に創出する総体性は諸個人の存在根拠の形成である。諸個人は、資本の諸連関として形成された地球的な労働の生産力に依存することによって、転倒しつつもそれを自己の延長にとらえている。孤立しあう諸個人の人格的形態は、その地盤として「交換価値」の支配する物象的連関を形成し、それが「全自然の探究」「地球の全面的な探究」「自然科学の最高度までの発展」¹¹を実現するシステムを形成する。

物象的な依存性のうえにきざかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求と、普遍的諸力能といったものの一つの体系が形成される。(『経済学批判要綱』¹²)

個別的生産過程を孤立的過程から世界的過程の諸器官に転換していく世界市場として創造された対象世界に連動して諸個人の生命過程は世界的であり、¹³資本の対立性は世界的な問題群として彼らに資本の止揚を、資本として発展する彼ら自身の生産力を彼ら自身の生産力として制御することを求める。資本主義は「諸個人の世界史的存在」¹⁴を生みだし、諸個人を「世界史的な、経験的に普遍的な諸個人」¹⁵という主体へとつくりあげる。

プロレタリアートは……世界史的にしか存在しえない……。
(『ドイツ・イデオロギー』¹⁶)

生産諸力にたいして大多数の個人が向きあっており、この諸力は彼らから引き離されていて、それゆえに、彼らはあらゆる現実的な生活内容をうばわれて、抽象的な諸個人になってしまったのだが、しかし、このことによってはじめて、彼らは、諸個人として相互に結合することができる境遇におかれるのである。(同上書)¹⁷

資本主義の前提である二重の意味で自由な労働者は、労働の客体的諸条件から分離し、自己の対象的内容を喪失し、孤立化し抽象化しているが、それによって彼は自然発生的共同性の依存の鎖から自立した抽象的にはあるが自由な法的な人格であり、自覚的に能動的に社会的連結を結ぶことが可能な能動的・主体的な存在になりうる。対象的内容を自己に対立する資本の世界としてつくりだすことによって、彼らは、他者のなかに、みずからの自由な発展の土台を見いだし、それをまさに自由な発展の土台として制御しようとする。抽象的な諸個人、疎外された諸個人は対象世界に對立的に向きあうことでその抽象性をみずから否定し、自由に自覚的に、自発的・積極的に協同する社会的主体として、彼らの対象世界である社会的労働の生産力を制御しようと運動していく。資本として能動化した制御されざる社会的内容を自由な諸個人がその自覚的な連帯・結合のもとに包摂しようとする。

「民主主義」「デモクラシー」とよばれるものななかみは、諸個人の自覚的な結合である。「民主制は人間から出発して、国家を客体化された人間たらしめる」(『ヘーゲル国法論(第二六一節―第三一三

節）の批判¹⁸。自然発生的な世界的生産過程を民主的に協同する諸個人が制御すること、先進的で民主的な労働する諸個人の協同のもとに世界的生産力を制御することとおして、諸個人は「他人の富の諸条件」に疎外された自己の諸条件を自己の諸条件に変え、役割を終えた資本という生産のありかたを止揚するであろう。

労働する諸個人が民主主義的制御による包摂を世界的に有機的に発展した生産過程に及ぼすこと、労働する諸個人による民主主義的協同が徹底され普遍化することが、資本の生み出す成果の主體的形態と客體的形態の統一として資本主義の自己超出を実現するはずである。社会をつくりだす自覚的な存在としての諸個人のもとに、自然発生的に資本が担ってきた、彼ら自身の生産的土台である労働の個別性と普遍性の媒介が現実化するであろう。

『資本論』第一部第七篇第二章は、資本の蓄積における現在の矛盾する運動をとらえる。ここに、私たちは、抽象的諸個人の危機として現れた、先進的で民主的な労働する諸個人による生産過程の制御という主題を読み込むことができる。

現代世界は資本主義という生きたシステム、社会的生産有機体を本体とする。社会的生産有機体は、対象世界（自然・社会）にたいして、自己の有機的延長として自己の普遍性の対象化として関わる人間を根源的な主体とする。この主体である労働する個人の矛盾、自己における矛盾が彼に対立する総体を形成し、この総体が生産関係の物象化のシステムとして諸範疇を分化し運動している。

資本主義は商品のシステムの否定的な自己実現である¹⁹。商品は、排除しあう私的諸労働への社会的労働の解消と、社会的労働への私

的諸労働の統合を担う実体である。労働は私的な社会的労働として、その社会的性格を商品に対象化している。単純流通 $W - G - W$ にたいして、 G を起点とする循環として自己を保持し増大する生きた貨幣が存立する。これが資本であり、貨幣の資本への不断の転化により、それは実現している。この転化の要をなすのが、二重の意味で自由な労働者の存在、すなわち、生産手段から分離し、かつ法的に自由である労働者の存在である。資本は、買い手によるその消費（使用価値の実現）が一日の労働であるような商品すなわち労働能力 \parallel 労働力を彼から購入し、自己の過程に包摂する。

$G - W - G'$ の秘密は、一日の労働が対象化する価値が、資本家が対価を払う労働力の日価値よりも大きい点にある。労働力商品の価値を規定するのは、労働者が消費する必須生活手段の生産に要する必須労働時間であるが、資本家による私的消費過程における労働力の使用はこれに限定されず、剰余労働時間による剰余価値の対象化がこの消費過程内で秘密裏に進行する。

『資本論』第一部における「剰余価値の生産」は、一回の過程の把握であった。「労賃」においては、この過程の産物である剰余価値がその源泉を隠蔽されて現われる。「労賃」形態は、労働力の価値または価格から分離して、労働者の受けとる貨幣が「労働の価値または価格」という法的形態をまとった姿である。「労賃」は、生産過程から独立化した、交換過程の仮象的な自己完結である。物神的形態のこの完結は、必須労働時間と剰余労働時間の区別を消し去り、ここでは、労働者と資本家は自由で平等という法的規定が貫かれる存在として現われている。労働者が対象化した価値は、生産という根拠

から孤立化し、「労賃」「利潤」という架空の源泉を付与された物神的形態をまとっている。

「労賃」に続く『資本論』第一部第七篇「資本の蓄積過程」が把握するのは、資本という物象的能動性がまとう正当性形態の破綻である。²⁰ 第二章「単純再生産」と第三章「剰余価値への資本の転化」をみてみよう。

一回かぎりの生産過程にたいして、その反復においてとらえられた再生産をみると、巨大な反転が現われる。「この単なる繰り返しまたは連続がこの過程にいくつかの新しい性格を押印する」(『資本論』S.592)。²¹ 自己再生産する資本主義総体がいかに自己否定的に自己を媒介しているのか。商品のシステムとしての資本主義の把握の要はこれにつぎるといってよい。

剰余価値を資本家が消費して投下資本額が同一であれば、生産過程が同一の規模で繰り返される単純再生産である。この部分は、剰余価値を資本に転化する資本の蓄積の基礎をなしている。

不断の更新においては、労働力に投下される可変資本が、資本家のファンドであるとする外観が消え、労働者自身の労働ファンド、生活手段のファンドの形態にすぎないことが明らかとなる。資本家の自己労働を想定した総資本もまた、他人の剰余労働の対象化に転化する。たとえば、剰余価値二〇〇ポンドを毎年消費する資本家が、彼のもつ一〇〇〇ポンドを前貸資本とするならば、この資本価値一〇〇〇ポンドは五年を経たのちには、彼が食い尽くした価値の等価となる。資本家が消費した剰余価値総額が、前貸資本価値の等価に達し、彼が労働することなく無償で取得し消費した剰余価値総額を

資本が代表する。

労働する諸個人が自己の客体的諸条件から分離している疎外は、資本の基礎であるが、それもまた資本の過程自身の産物として現われている。「彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のものとなれ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかで絶えず他人の生産物に対象化される」(S.596)。事実として与えられた二重の意味で自由な労働者の存在が「特有の結果として絶えず繰り返し生産され永久化される」(S.595)。労働者による自由な個人的消費も、資本から排出された生活手段が労働力に転化する資本の再生産の契機をなす。労働者は直接的生産過程の外でも資本の付属物である。労働力とその客体的諸条件の分離を資本は再生産する。孤立した交換では、労働者と資本家の相対は偶然にすぎない。ところが、不断に流れる過程の総体においては、労働力販売は強制として現われ、資本家の側では他人の労働の産物が無償で消費ファンドに転化している。

剰余価値のうち資本家の消費ファンドではない部分は、追加資本に転化し、資本蓄積を実現する。追加資本が取得した剰余価値は、さらに追加資本に転化し、「過去の不払労働の所有」(S.609)が、拡大する規模での他人労働の無償の取得の条件となる。蓄積を導いた原資本による交換は、また一つ一つの交換それ自体は、等価交換であり、自由で平等な私的所有者という法的人格の規定を交換者は受けとっている。資本家の私的所有は自己労働が想定されている。しかし、流れにおいて事態は一転する。²² 労働力と交換される資本部分は無償で取得した他人労働の産物であり、これは再び剰余価値を取

得して補填される。私的所有は「資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利」に、「労働者の側では彼自身生産物を取得することの不可能」に転化し、交換の外観を解消する。これが商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転回である。蓄積が前提する交換は、孤立的には自由な私的所有をそれ自身の尺度とするが、蓄積において拡がる流れの契機として私的所有は承認されざる権利という承認において、自由な私的所有とは正反対の内容を不可避的に露出する。労賃の物神的形態は破綻し、本質であった関係が現れ出る。²³

3 地球規模での普遍的世界と社会的諸個人の形成 ——現代民主主義による変革の立脚点

第二章と第二章の内容の中心部を確認した。商品のシステムとしての資本主義の実現は、社会的生産実体を機動力とする資本蓄積と、資本の前提である自由な私的所有という相互承認との相互批判として、資本主義の自己批判である。資本主義は発展するがゆえに自己批判する。

資本主義のこの正当性破綻は、生産過程を労働する諸個人が自己の環境として認識することを意味する。孤立した交換の合法的形式から分離して、過程の総体は労働する諸個人自身の環境であることを示している。

すでに相対的剰余価値論において人権は労働する諸個人の人権として具体化しており、大工業という内容に即して、デモクラシーが生産過程を制御する方向に発展することが示唆されていた。それを

ふまえて前節で確認した「転回」論はデモクラシー／民主主義の現代的徹底を把握している。諸個人が対象から引き裂かれた自己として現われることは、デモクラシーの起点であった。生産手段と共同体を喪失する代わりに自己のみを諸個人は世界の根拠として自覚する。抽象的ではあるが、まさに抽象的であることによって、諸個人は自己を自覚し、自己を対象世界の形成者として自覚しうる。資本主義がつくりだす社会的生産は、この主体に対立する他者として、物象の世界として形成された対象世界である。転回とは、この対象世界を他者における自己の世界としてデモクラシーの主体に対面させ、デモクラシーの陶冶を導くことである。

単純につかまれた貨幣諸関係のなかでは、ブルジョア社会の内面的対立がすべて消し去られたようにみえ、またこの面からして、ブルジョア経済学者によつて現存の経済的諸関係を弁護するための逃げ場とされる以上に（かれらはこのばあい少なくとも首尾一貫して、交換価値と交換という、貨幣関係以上に単純な関係にさかのぼる）、ブルジョア民主主義によつて、この貨幣関係がふたたび逃げ場に使われるのである。（『経済学批判要綱』²⁴）

再生産の媒介から分離した「貨幣諸関係」の抽象性、抽象化された交換の諸関連にとどまり、労働する諸個人を蓄積の手段として消費する資本の「内在的対立」を隠蔽することがデモクラシーの物神崇拜的制限性である。諸個人の自由な自発的な社会形成原理として

のデモクラシー一般に対する嘲笑という知的・実践的退廃はこの幻想的形態か、その裏返しにすぎない。現実総体の自己疎外、分裂をつかむことなく、民主主義一般を捨て去ろうとするのは、物神性に囚われた思考である。現代デモクラシーは労働する諸個人が資本の生産諸力・諸関係を真に普遍的な自己に転換するための関係であり運動である。

資本主義は絶えずその市民諸個人の人権という建前を裏切り全体を主体化させてしまう。労働する諸個人がこの敵対的な全体の方として現れる人間諸個人の自然的・社会的諸力を自己のもとに包摂しようとする闘いは、労働する市民の人権の発展として現われる。労働する諸個人は、市民革命の崇高さを受けつぎ、表現の自由など市民的な権利を擁護し発展させようとする。労働する諸個人は、労働日の法律的制限や社会保障の権利などに人権を具体化する。資本の大工業において、その社会的一体性を資本の力に疎外している人民は労働する諸個人であり、市民革命の革命的精神と対立し、そこに包摂されるべき対象はいまや企業社会である。資本とその世界を、すべて労働する諸個人の対象化された自己として暴き出すのが「転回」であった。

抽象的なデモクラシーはその抽象性という限界を露呈し、生産過程が形成する自己の対象世界をその対象として、発展するデモクラシーへと転換する。民主的で先進的な労働する諸個人の実践的な陶冶として民主主義／デモクラシーは徹底される。²⁵ 現代の労働する諸個人のデモクラシーという、疎外された労働する諸個人がそこで実践的に陶冶される自由な連合において、対象的世界のすべてが労働

する諸個人の対象的自己であるという人類史の真理が変革の根拠として総括されているといえよう。私的所有の下で対立的に成長した社会的労働・社会的生産手段、世界的交通を前提して、²⁶ 世界的デモクラシーの徹底線上に自由な人間社会が狭隘な外皮を破って形態化するであろう。

4 人権・労働・環境

——グローバル・デモクラシーの展開

資本のもとでの生産の発展は、労働する諸個人の社会的生産の対立的な形態における発展であり、対立的形態を脱して諸個人の自由な発展の真の基礎に転換・現実化すべきものである。マルクスは、一八七〇年のイギリスを資本主義が全産業に浸透し、世界市場を支配するまでに成熟した唯一の国ととらえ、イギリスに成熟した生産の諸条件をイギリス人だけのものではなく万人が共有すべき、万人が奪回すべき変革の諸条件として考えていた。

イギリスは……その世界市場の支配によって、その経済関係におけるどんな革命も、直接に全世界に作用を及ぼさざるをえないただひとつの国である。地主制度と資本主義がこの国にその古典的な本拠をもつていとすれば、他方ではこれを破壊する物質的諸条件がここで最も成熟しているわけである。……これをイギリス人だけの手にゆだねるのは、なんと**い**うばかりか**こ**とであろう。イギリスはたんに他の諸国とならぶ国として扱われるべきではない。——イギリスは資本の本国として扱われる

べきである。……（総評議会からラテン系スイス連合評議会へ）²⁸

発展した資本は一国民のものではなく、万国の労働する諸個人が奪還すべき普遍的な力である。「ブルジョア時代の成果である世界市場と近代的生産力をわがものとし、これらをもっとも先進的な諸国人民の共同管理のもとにおいたとき」、資本の形式でつくりだされた普遍的なものは諸個人自身の普遍的なものに、進歩は諸個人を犠牲にする敵対的な形態におけるものから諸個人自身の進歩に転換する。

資本主義のつくりだすグローバリゼーションが資本の内面的矛盾の展開であり、容赦のない疎外の過程であることはいうをまたない。

これまでブルジョアジーは、個人をも全人民をも、血と泥のなか、悲惨と墮落のなかを引きずることなく、一つの進歩でもなしとげたことがあるか？（「イギリスのインド支配の将来の結果」）³⁰

人間・自然を犠牲にする人間・自然の発展は狭隘な通過点であり、それを突破して悲惨による進歩、敵対的な進歩を人間自身の進歩に転換するのも、自己疎外している人間自身にほかならない。労働する諸個人が彼らを覆う局地的な共同的なヴェールを剥がされ、資本の付属物へと徹底的に解体される悲運が、彼らを普遍的な人類社会に実践的に関心を有する世界的な主体へと転換していく。

もし産業革命がおこらなかったとすれば、たしかにきわめてロマンティックで情緒に富んではいたが、人間にはふさわしくないような生活から、けつしてぬけることはなかったであろう。彼らはまさに人間ではなく、これまで歴史を導いてきた少数の貴族に奉仕する働く機械にすぎなかった。産業革命は、このような状態からの帰結を徹底的におしすすめたにすぎないのであって、労働者をただの機械にまったく変えてしまい、労働者の手に残されていた独立的な活動の最後の残りかすまで奪い去ったが、まさにこうすることによって、労働者にたいしてものを考え、人間的地位を要求する刺激をあたえたのである。一般的な人類の利害にたいして無感覚となっていた最後の階級を歴史の渦中にまきこんだものこそ、フランスでは政治であったように、イギリスでは工業とブルジョア社会一般の運動であった。（エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』）³¹

資本のもとの大工業が、労働する諸個人を「人間」として目覚めさせ、自覚的に結びあう連合の力によって、諸個人は資本の壊滅的影響を制限しようとする。彼らを剰余価値を生む物として消費し、蓄積の材料として直接搾取される群と予備軍に分割し、貧困を蓄積する資本の飽くなき拡大欲求が、彼らを「ものを考え」連帯する諸個人へと社会化する。資本のグローバリゼーションの力として対立的に形成されているのは、諸個人の非有機的的身体としての対象世界であり、この諸個人自身の自然・社会の力を諸個人の制御のもとに包摂するべく、諸個人の連帯もまたグローバルでなければならない。³²

資本主義は連帯する「万国の」自由な労働する諸個人を生み出すのである。

資本主義が産出する客体的な人類史的獲得物は、私的所有を前提しつつそれを止揚する形態である、大工業における科学を適用した社会的生産手段と社会的労働組織の体系、および、諸資本の連動する世界的な交通、世界市場であり、主体的な形態の成果は、自由に社会化する人間、世界的に結合し自由に「ものを考え」行動する労働する諸個人の階級にほかならない。資本主義が生み出すのは、自由な労働する諸個人と社会的生産に立脚したその民主主義的・自覚的社会的連合なのである。世界的なデモクラシーを担う労働する諸個人を資本主義は必然化することにおいて、資本主義はみずからを解消しつつある通過点なのであるともいってよい。

資本主義は、人権とデモクラシーの主体である諸個人にたいして、資本主義の問題として社会的・世界的生産過程を、民主的に協同管理すべき公共性として公開し、諸個人を自覚的な社会的諸個人として陶冶する。この世界的な諸個人に対して転倒的な客体的世界としての資本が現象するのは、地球規模での三つの問題群、すなわち「人権」「労働」「環境」である。³⁴ これらの問題群として資本主義の問題が民主的に解決すべきものとして公開されているのである。

この三つの問題群は、関連のない孤立した主題ではなく、有機的な統一に帰しつつ浮上する同一の問題にほかならない。資本がその物神的神秘化から飛び出してその対立性、転倒的能動性を民主的な諸個人の意識に対して露出している問題である。これら三つの分野に現われているのは、蓄積のための蓄積、成長のための成長の限界

であり、敵対的利害の運動に収奪されている私たちの世界のありようと、その解決に向けて先進的諸人民の国際的合意が不断に形成され、国際的管理が試みられていることにほかならない。

「企業と人権」として意識される問題においては、人間の尊厳、自由な諸個人としての社会的承認を企業という現実的な社会的労働組織において実現することが課題となっている。資本に成立した実態としての公共空間、人々の共同的な空間を、社会の主人公である諸個人の協同の土台に、真に諸個人が自由な結びあう世界に転換するという根源的な課題がそこには現われている。超国籍企業の社会的責任（CSR）³⁵などの形で企業が人権保障の義務を負うのも、人権が抽象的な「政治的解放」³⁶の空間から、現実世界の対立的な電である市民社会、経済世界における武器にまで具体化していることを意味する。「企業献金」においては、自由な諸個人の政治的結合、共同体権力の人民主権による掣肘にたいして、社会的生産の力が資本の増殖の力として現われ対立している。これも「取得法則の転回」の問題圏を示す現象である。企業において社会的生産過程が私的所有に疎遠に実体的な公共性として露出しているがゆえに、人権・労働・環境が企業の社会的責任としても問題化している。労働する諸個人の自己の環境として社会的生産過程を管理することが実践的な課題となつていのである。

資本主義は、諸個人から自然と社会という対象を奪うことによつて、彼らを局地的な自然と共同体の小宇宙に埋もれた有機的客体の器官から、内容から引き離された抽象化された人間に解体し、そのことによつて彼らを自覚的に連合しうる諸個人に転換した。つぎに、

資本主義は、自由になった労働力を集中し社会的生産手段に結合する資本の力として、諸個人の社会的生産という土台を急速に発展させ、諸個人の民主的制御の対象として現実の生産過程そのものをつくりだす。資本主義は、抽象的な形でデモクラシーを成立させ、社会的労働の対立的発展によってそれを陶冶する。

「児童労働」「強制労働」においては、交換における自由な法的主体性という外観すら突破して物象的生産関係が露出し、搾取が露呈している。これらを廃絶しようとする国際的な取り組みも、「すべての人にディーセント・ワークを」という国際機関における合意形成とその実現のための努力も、労働の世界化に不可欠であり、資本に対して世界的なデモクラシーの網をかける試みである。

資本の文明的な面の一つは、資本がこの剰余労働を、生産力や社会的関係の発展のためにも、またより高度な新形成のための諸要素の創造のためにも、以前の奴隷制や農奴制などの諸形態のもとでよりもより有利な仕方と条件とのもとで強要するということである。（『資本論』第三部）³⁷

諸個人の自由な時間を創造する可能性をもたらす大工業の発展は、その資本主義的表現において、諸個人の時間を収奪する他人の富の発展であり、この資本の力の展開が諸個人の環境を収奪、破壊している。³⁸ 資本の剰余労働への渴望は、持続可能な環境の維持・形成ではありえない。労働問題と環境問題は別々の問題ではない。諸個人を価値増殖運動に吸収する、貨幣のための貨幣の増大³⁹という悪

無限的な成長の、蓄積のための蓄積の限界が露呈しているのであり、物象・資本の無政府的運動に発展をゆだねるシステムの有限性が問われているのである。

いわゆる「地球環境問題」は、人間一般とその外部の自然の関係などではなく、資本主義として実現した経済総体が諸個人の自己の環境として制御すべき対象であることを示すのであり、地球規模での労働問題とじつは同一の問題である。⁴¹

課題はトータルなものとして立てられている。資本が人権・労働・環境と表象される世界を自己の運動に対立的に統一し、世界から地域へ、地域から世界へ有機的に自己を形成することに即して、デモクラシーもまた統一的で有機的なものとして発展しなければならぬ。

テクノロジーや市場の拡大がすべてを解決すると考える無思想は、成長主義として現われた膨張しつつける貨幣への物神崇拜にすぎず、反テクノロジー・反市場という空想も、グローバリゼーションを外部ととらえて周辺や局地を対置する二元論的主張も、現象に現われた矛盾を見ているにすぎず、諸個人の自由な発展の確固とした物質的諸条件の生成を矛盾としてつかむことがない。労働する個人の自己矛盾に定位し対象の生きた矛盾を把握するマルクスの批判的現代認識は生きた総体性に発展する対象の自己を把握する。

プロレタリアートの一部は、交換銀行や労働者協同組合のような、空論的な実験に熱中する。つまり、古い世界自身のもつている巨大な手段をすべて使って、この古い世界を変革すること

をあきめて、むしろ社会のうしろで、個人的に、プロレタリアートの限られた生存条件の範囲内で、プロレタリアートの救いをなしとげようとする運動、したがってかならず失敗するにきまっている運動に、熱中する。(『ルイ・ボナパルトのプリユメール一八日』⁴³)

……ブルジョア社会、つまり交換価値に立脚した社会の内部でつくりだされる生産諸関係ならびに交易諸関係こそは、同時にまた、それらとちょうど同数の、ブルジョア社会を爆破するための爆弾ともなるのである。(『経済学批判要綱』⁴⁴)

資本主義とは、人類社会の産みの苦しみの総括であり、自己を止揚しつつある過渡的なシステムである。資本主義の限界を指し示す問題群として、人権と民主主義の展開、労働問題、地球環境が与えられ、この人類史的課題の解決としてマルクスのとらえた人間解放の運動が現代に生きている。端的にそれは、無政府的なグローバルゼーションにたいして、民主的な協同的制御の網をかけ、資本の物象的力としての諸力の敵対的発動を永眠に導く運動である。世界市場に総体化した資本を総合的な計画性のもとで制御の網に包摂し総体的に調整・運転するデモクラシーの徹底をとおして、社会的生産過程の協同的管理をとおして、労働する諸個人の普遍性がその総体的疎外において資本の力として発動する転倒を止揚することが真にグローバルな課題である。

資本主義の自己否定の終了、新たな生産のありかたへの転換は、

総体的である。法、国家、銀行などの社会の諸関係はそれ自体孤立的に現われるが、資本主義の自己形態として資本主義という自己にとらえられて必然的に存立する。資本主義の総体性を前提しているその諸器官の孤立の変更に試みは「かならず失敗するにきまっている運動」である。そのブルードン批判において明らかのようにマルクスが一貫して批判するのは、労働者の銀行によって商品が貨幣・資本に転化するのを防ごうとするブルジョアの幻想であり、幻想的な出发点として現われる所有関係を変革することで社会を変革する試みであり、姿態の変革が生きた社会総体を変革できるかのようにとらえる幻想であった。

資本主義の到達点は、主体の形態としては、矛盾において民主主義を発展させている自由な個人(普遍的な人権)であり、客体としては、矛盾として深化する世界的な交通・流通(世界市場)、矛盾として発展する世界的な生産(社会的労働と社会的生産手段)であった。成長主義を乗り越えるトータルな変革への道は、この到達点を土台にすることよってのみ切り開かれる。貨幣という物象を原理とする現在の持続不可能な、成長主義的システムから、人間そのものを原理とするシステムへと巨大な転換が必然化している。対象世界を人間が自己に有機化する運動を搾取しながら生産のための生産、蓄積のための蓄積を無慈悲に遂行する成長主義、資本の自己増殖による発展から、世界的な生産と市場を自由で民主的な諸個人が協同的に制御し、自覚的な発展の基盤に転換することが、現代の課題である。

- 1 対象における対象の発生を把握すること、対象を自己として把握する「存在主義」がヘーゲルを批判的に継承したマルクスの労働論の意義であり、その資本主義把握は、疎外された労働論・生産関係の物象化論・私的所有の正当性破綻論として実現する矛盾論的システム把握である。マルクスのこの包括的な学問的意義を復権する作業は、有井行夫『マルクスの社会システム理論』有斐閣、一九八七年、同『株式会社の正当性と所有理論』青木書店、一九九一年、同『マルクスはいかに考えたか——資本の現象学』桜井書店、二〇一〇年、など。現在の自己(生きた総体性)の矛盾する運動がその止揚を、将来の媒介的な統一を指示するのであり、マルクスは資本の現在が語る人類史を理論的にとらえた。マルクスの人類史把握が矛盾としての現在を中心に本源的統一としての過去と媒介的統一としての未来という三段階論であり、これが労働・物象・人格のシステムという存在層に即して三つ提起される点は、有井、前掲『マルクスはいかに考えたか』二二六—二二七頁、同『株式会社の正当性と所有理論』二六七—二七〇頁。マルクスの未来社会把握は、疎外された労働というシステムの発生点における本質的矛盾に立脚しており、対象に外在的な理想などではない。大谷禎之介『マルクスのアソシエーション論——未来社会は資本主義のなかに見えている』桜井書店、二〇一一年、八一—八三頁。「資本主義の胎内に社会主義がはらまれている」(山口正之『社会経済学』なにを再生するか』青木書店、一九九四年、二二八頁)。
- 2 MEGA (Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe) II/1.2, 1981, S. 438. 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』一八五七—一八五八年の経済学草稿』大月書店、一九九三年、二一六—二一七頁。以下、マルクスからの引用にさいし、訳文は、原文の強調を省くなど断りなく若干手を入れる場合がある。引用文中の……は引用者による省略を意味する。
- 3 Ebd., S. 322. 同上邦訳書、一七—一八頁。
- 4 Ebd., S. 439-440. 同上邦訳書、二二—二九頁。
- 5 Ebd., S. 438-440. 同上邦訳書、二二—二六頁。
- 6 MEW (Karl Marx - Friedrich Engels Werke) Bd. 29, 1963, S. 360. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクスIIエンゲルス全集』第二九巻、大月書店、一九七二年、二八二頁。
- 7 MEW, Bd. 9, 1960, S. 226. 『マルクス・エンゲルス全集』第九巻、一九六二年、二七—二八頁。
- 8 MEGA II/1.1, S. 94. 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』一九八一年、一四四頁。
- 9 MEGA II/1.2, S. 322. 『資本論草稿集』一三七一—一三八頁。
- 10 MEGA II/4.1, S. 65. 岡崎次郎訳、国民文庫、一九七〇年、三二—三三頁。
- 11 MEGA II/1.2, S. 321-322. 『資本論草稿集』一七頁。
- 12 MEGA II/1.1, 1976, S. 91. 『資本論草稿集』一三八頁。
- 13 「大工業は世界市場をつくりだした。……ブルジョアジーは、歴史上きわめて革命的な役割を演じた。……ブルジョアジーは、世界市場の開発をつうじて、あらゆる国々の生産と消費を全世界的なものにした。……昔の地方的、また国民的な自給自足や閉鎖に代わって、諸国民の全面的な交通、その全面的な依存関係が現われてくる」(『共産党宣言』MEW, Bd. 4, 1959, S. 463-466. 『マルクス・エンゲルス全集』第四巻、一九六〇年、四七七—四七九頁)。
- 14 渋谷正編・訳『草稿完全復刻版』ドイツ・イデオロギー「序文・第一巻第一章」新日本出版社、一九九八年、六九頁。
- 15 同上邦訳書、六七頁。
- 16 同上邦訳書、六七—六九頁。
- 17 同上邦訳書、一六六—一六七頁。
- 18 MEW, Bd. 1, 1956, S. 231. 『マルクス・エンゲルス全集』第一巻、一九五九年、二六三頁。
- 19 有井、前掲『マルクスはいかに考えたか』は、疎外された労働、商品、二重の意味で自由な労働者という主体の関係運動(三つの「ルーブ」)の記述として『資本論』をつかんでいる。『資本論』は疎外された労働を前提しつつ、直接の出発点である商品が自己の前提を措定する生きた関係の把握である。
- 20 「労賃」形態における物神的形態の完成と、単純再生産・拡大再生産

- がそれを破綻させる意義については、とくに、有井前掲『株式会社の正当性と所有理論』二五四―二六〇頁。
- 21 以下、『資本論』第一部第七篇(MEW Bd. 23b, 1962: 『マルクス・エンゲルス全集』第三卷第二分冊、一九六五年)からの引用に際しては、本文中に丸括弧で原典頁番号を記す。
- 22 「過程の連続において事態を把握することは、商品交換の個人主義的視野の提起する内容にそくしてこれを突破して、階級的・社会的連関において把握することである」(有井、前掲『株式会社の正当性と所有理論』二五八頁)。
- 23 「転回」論は、「私的姿態」(「承認の抽象性」と「社会的姿態」)、「搾取」「非承認性」との「相互批判」として「資本のシステム」の「自己批判を完遂できずに自己批判をつづける存立」をとらえる(有井、同上書、二六四頁)。
- 24 MEGA II/1.1, S. 162-165: 『資本論草稿集1』二七五頁。
- 25 民主主義の具体化は、有井、前掲『株式会社の正当性と所有理論』三四九―三五二頁。「内容的な民主主義の現実性は、その形成対象とする……: 相対する社会的なもの現実性に依存する」(同上書、三四九頁)。
- 26 「諸資本は……: 諸資本の公共性の形態化を、国際的公共性の形態化として実現しつつある」(同上書、三四八頁)。
- 27 「資本主義的発展のめつとも民主主義的形態」のための闘争のほかに、どこか純粋な『社会革命』のための闘争があるわけではない」(山口、前掲書、一七六頁)。
- 28 MEW Bd. 16, 1962, S. 386-387: 『マルクス・エンゲルス全集』第一六巻、一九六六年、三八〇―三八二頁。引用箇所につづけてマルクスは、アイルランドがイギリスの地主制の「堡壘」であり、イギリスとアイルランドのプロレタリアの「分裂」をイギリスのブルジョアジーが「その権力の維持の真の秘訣であることを知っている」と述べている(S. 387-388, 三八二―三八二頁)。「労働する諸個人の普遍的な団結の重要性が「グローバル化」の進む現在ますます高まっていることは、現在の「排外主義」の横行、諸個人の分断とファッショ的統合などに
- も明らかである。
- 29 「イギリスのインド支配の将来の結果」MEW Bd. 9, S. 226: 『マルクス・エンゲルス全集』第九巻、二一八頁。
- 30 Ebd., S. 224: 同上邦訳書、二一六頁。
- 31 MEW Bd. 2, 1957, S. 239: 『全集』一九六〇年、第二巻、二二二頁。「資本主義の『不安定』こそ、社会的発展を促進し、ますます多数の住民大衆を社会生活のうずまきこみ、彼らに社会生活の体制について熟考させ、彼らに自分で『自分の幸福をきたえる』ようにさせるところの巨大な進歩的要因であるという事実」(レーニン『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編『マルクス・レーニン主義研究所訳『レーニン全集』第二巻、大月書店、一九五四年、二〇五頁)。「強制される苦痛が、結合を自覚的連帯に発展させるをますます強く意識させる」(山口正之『経済科学におけるレーニン主義』沙文社、一九七三年、七一頁)。
- 32 「人間は原生的ゲマインシャフトの自然の楽園にもう一度立ち戻ることはできない。前に進んで全体的に発達した個人としての世界史的人間のために、自由な人間のために、たたかい抜くべきなのである」(山口、前掲『社会経済学』なにを再生するか、一三三頁)。
- 33 「資本主義的生産の主要事実」としてマルクスが『資本論』第三部第一五章であげているのは、対立的形態で私的所有と私的労働を廃棄する生産手段の集積と社会的労働の組織、そして世界市場であった(MEW Bd. 25a, 1964, S. 276-277: MEGA II/4.2, 1992, S. 339: 『全集』第二五a巻、一九六六年、三三三―三三四頁)。
- 34 システムの存在層に即した資本の露出を、地球環境問題、長時間労働、企業政治献金において示した、有井行夫『「物象化」と現代社会——マルクスの問題提起を考える』、『法経論集』(静岡大学)第三〇号、一九九四年三月。環境・労働・人権が、国際社会の課題として合意されているのも、それが資本の飽くなき増大が衝突する、自然人間と社会の普遍的な場面の区別だからである。
- 35 国連や国際機関によるCSRのグローバルな制度化も、現代におけ

- る資本の自己否定的な展開である（小栗崇資「現代株式資本の自己否定性」『季刊 経済理論』第四卷第一号、二〇〇七年四月）。
- 36 『ユタヤ人問題によせて』（MEW Bd. 1, 1956 『全集』第一卷、一九五九年）における「政治的解放」から、「貨幣の力」を止揚する「人間的解放」へというテーゼを想起されたい。
- 37 MEW Bd. 25b, 1964, S. 827. MEGA II/4.2, S. 837. 『全集』第二五b巻、一九六七年、一〇五〇頁。
- 38 『資本論』第三部「三位一体的定式」における、労働日の短縮を諸個人の発展の土台とする「自由」の記述（MEW Bd. 25b, S. 828. MEGA II/4.2, S. 837-838. 『全集』第二五b巻、一九六七年、一〇五〇—一〇五一頁）。また、ケインズの「三時間労働」論（ケインズ「わが孫たちの経済的可能性」『ケインズ全集』第九卷、宮崎義一訳、東洋経済新報社、一九八一年、三九六頁）。
- 39 「富の蓄積がもはや高い社会的重要性をもたないようになると……財産としての貨幣愛は……半ば病理的な性癖の一つとして、見られるようになるだろう」（ケインズ、同上邦訳書、三九七頁）。
- 40 成長主義の行き詰まりとして資本主義の有限性をとらえた、久留間健『資本主義は存続できるか——成長至上主義の破綻』大月書店、二〇〇三年。
- 41 マルクスの『経済学・哲学草稿』の労働論を資本主義の批判的把握の拠点としてふまえた、山本孝則「現代資本主義社会の対立基軸としての『環境』——『環境』自己外部」論から『自己延長論』へ」『政経研究』第一〇三号、二〇一四年二月。
- 42 「小生産に対する大資本の進歩性の認知は、けっして『弁護』ではないということ」（前掲『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』二六三頁）。
- 43 MEW Bd. 8, 1960, S. 122. 『マルクス・エンゲルス全集』第二九卷、一九六二年、一一五頁。
- 44 MEGA II/1.1, S. 92. 『資本論草稿集1』一四〇頁。